

氏 名 長尾 洋子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 253 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 〈うたの町〉をめぐる近代の空間誌
——おわら風の盆の半世紀に耳を澄ます——

論文審査委員 主 査 教授 坪井 秀人
教授 細川 周平
教授 安井 眞奈美
教授 中原 ゆかり 愛媛大学 法文学部
教授 米家 志乃布 法政大学 文学部

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

今日、「民謡」は「定まった歌詞と旋律を持つ、特定の地域を代表する伝統的な歌」（武田二〇〇七、四〇七頁）と一般に理解されている。しかし、一九八〇年代末以降に活発化した批判的研究は、そうした理解がナショナリズム運動の中で生み出され、メディアの発達と結びついた音楽産業の進展とともに内実化し、学問分野の成立に深く関わり、観光の大衆化や地域振興などと連動して成立したことを明らかにしてきた。これらは近代にまつわる問題である。

近代は長く時間的概念として捉えられてきた。しかし、近代が自明のうちに前提としていた空間（性）はメディア・テクノロジーの進展やグローバリゼーションの加速化によって解体が進み、西欧近代を基準とした単一の時間観が相対化され、近代は場所によって異なる意味や過程を呈し、「それらの相互の節合として初めて語られうる空間的な過程」（吉見 二〇〇三、一五七頁）とする見方が広範に受け入れられつつある。近代を空間的に捉え直す作業は、文化やアイデンティティの単位や固有性を暗黙裡に画定していた境界、そうした境界を想定するような思考様式をも揺るがした。しかしながら、近代の重要な産物のひとつである「民謡」について、空間的な再検討はほとんど行われてこなかった。

本研究は以上のような問題意識の下、「民謡」とそれをめぐる表現、文化、空間がおもに二〇世紀前半の日本という文脈—さまざまな要素や力の流れが複雑な関係を織りなす環境—のなかでどのような展開をみせたかを探る試みである。より具体的には、越中おわら節（以下おわら）の歌詞に詠われた〈うたの町〉を視座に据え、近代の時空間がどのように生成、再編成されたかを描き出す。

序論では〈うたの町〉がおわらの本場とされる富山市八尾町のみならず、「民謡」の近代にとって象徴的な意味を担うことを示し、視座としての有効性を述べる。また国文学、民俗学、地理学における先行研究を吟味し、「民謡」を含むうたの空間誌の可能性について検討する。

第一章は政府がはじめて編纂した民謡集『俚謡集』（一九一四年）の成立過程をたどることにより、〈うたの町〉が明確な像を結ぶ以前の歴史において、どのような空間の秩序化が目論まれていたかを探る。『俚謡集』はそれまでの民謡集とは制度的背景や調査プロセスが異なっており、うたの序列化と空間的再配置を引き起こす重大な意義を有していた。この章では国民国家形成へと向かわせる政策がどのような回路を伝って各地の生活の場、うたや踊りの場と交渉しはじめたのかを描き、いずれは〈うたの町〉を生じさせることになる言語空間、やわらかな統制が促した空間編成の一端を明らかにする。

第二章が焦点をあてるのは一九一三年に開催された富山県主催一府八県連合共進会である。共進会のモデルとなる博覧会は近代を象徴する文化装置であり、人びとは博覧会を巡回することで身体的に、また観覧することで視覚的に、世界についての認識と想像力を獲得する。富山県を代表する演目のひとつとして演じられたおわらの舞台は八尾町民に刺戟を与え、自らの創意による踊りの振付につながった。ここでは後に地域社会を単位として伝承されるようになる踊りの誕生とその身体性、博覧会的空間が体現した近代とがどのような関係をもっていたかを検討する。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

第三章ははじめて「民謡」の語を冠して開かれた演奏会「全国民謡大会」をとりあげ、「民謡」の位置づけの変化および演唱空間の拡大過程を跡づける。主催者後藤桃水は宮城から上京し、東京を拠点に各地のうたの認知向上と演奏会場、演奏機会の確保に奔走した。八尾町のおわらは全国民謡大会に出演することで東京に進出し、いわば「全国区デビュー」をはたした。国家の政策とは異なる次元で展開された「民謡」普及活動の意義を空間の視点から問うとともに、各地のうたと〈中央〉との関係を民衆レベルで浮かび上がらせる。

第四章は近代詩運動をとりあげる。大正期に興隆した近代詩運動は文学の領域にとどまらず、地域の文化や〈中央〉と〈地方〉の関係、表象のあり方にまで影響を及ぼした。富山県では日本海詩人連盟が発足し、機関誌『日本海詩人』は県下の詩人にとって重要な発表と交流の場となった。近世以来親しまれていたおわらは近代詩運動に接触したことによって純朴さや平明な表現を重視するようになる。この章では近代詩運動との接触によって生じたおわらの変化を探り、どのような地方性が現出するに至ったかを明らかにする。

第五章は昭和初期において八尾町のおわらに新たに踊りが振付けられた過程を精査し、それが郷土芸術の探求の一環として行われたこと、そして空間のジェンダー的再編成をもなっていたことを明らかにする。〈新踊〉とよばれるこの振付は一九二九年日本橋三越での富山県物産陳列会の余興出演のために案出され、八尾町のおわらにおける「見せる」身体性への移行を劇的に推し進めた。性別によって二種の踊りが創られ、踊りの主体、表象、それらの価値づけに関する問題は青年団、農村娯楽、花柳文化、童謡舞踊といった領域に及んだ。

第六章では、一九二九年に発足した越中八尾民謡おわら保存会（以下、おわら保存会）が〈うたの町〉の輪郭を一気に鮮明にしていく様相を描く。歌詞募集事業をはじめとして、おわら保存会は多彩なイメージ創出と空間演出を展開する。その際、何が構想され、実現され、あるいは挫けたのか。ルフェーブのいうところの空間的实践として〈うたの町〉の形成を描く。

第七章はアジア太平洋戦争下のおわらが主題である。おわらと戦争との関係について今日話題にのぼることはない。しかし、おわらをめぐる近代の経験としてふれないわけにはいかない。なぜなら、総力戦体制に向かう過程、その体制下における経験は、国民生活のあらゆる面において合理化が目指された近代化の重要な局面を構成していたからである。この章では、慰問歌詞の創作からはじまった戦争との関わりがどのように展開したかを、〈うたの町〉と〈中央〉文壇との関係、翼賛体制の動向などに関連付けて論じる。

〈うたの町〉をめぐる近代の空間誌は、二〇世紀前半の日本という文脈においてうたがくぐりぬけた次の四つの過程を浮かび上がらせた。①統治と権力の問題にまつわる過程、②身体にまつわる過程、③資本主義の深化（消費社会の形成と拡大）にかかわる過程、④地理的想像力とその物質性にかかわる過程である。そこには人間の相互行為の舞台装置として空間を利用する実践が、ひるがえってその空間としての文脈性を規定する作用がはたらいており、不断の再文脈化が起っていた。〈うたの町〉をめぐる近代とは、変形しながら反復される統制、生き延びるための本能とも技巧を要する戦術ともつかない実践、これらに絡みつく身体性、美学、資本主義、地理的想像力、物質性が再文脈化を通じて響き合う時空間なのであった。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

引用文献

武田俊輔「『民謡』の再編成」、徳丸吉彦、高橋悠治、北中正和、渡辺裕編『事典 世界音楽の本』岩波書店、二〇〇七年

吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院、二〇〇三年

博士論文審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、昨今著しく発展を遂げている日本の民謡研究を、概念や理論から批判的に問い直すと同時に、永年にわたる豊かな現地調査に基づき、地理学と歴史学の双方の視点を生かして「空間誌」という方法を提示した意欲的な論考である。着実でかつ野心的な論の展開は今後の民謡研究、文化史の重要な一歩といえる。ここでは全国的に知られた一曲を例に「伝統」というものが国民文化形成の運動の中で「発明」され、メディアや録音の発達と結びついた音楽産業の進展とともに内実化し、民俗学、文芸史その他の学問分野の成立に深く関わり、観光の大衆化や地域振興などと連動して成立したことが明らかにされた。これは歌の盛衰・伝播に留まらず、近代という時代の根幹にかかわる問題提起である。

近代化に伴う空間性の解体と再編成を、富山県八尾町のおわらがひとつの地域文化運動として、20世紀前半に経験したことから微細に掘り下げようというのが本論文の骨子である。多くの学問領域の理論を駆使し、多面的な運動であったことを的確に論じ、空間の再編成の立場から、日本の近代が発明した一曲の「民謡」に徹底的な検討を加えている。その一曲をめぐる表現、歌詞、演奏者と聴衆、身体、評価、そして空間が日本という文脈——さまざまな要素や力の流れが複雑な関係を織りなす環境——のなかでどのような展開をみせたかを、その歌詞が讃える〈うたの町〉という自己認識を視座に据えて描き出す。この方法を著者は学際的な新概念「空間誌」として提唱している。

序論では〈うたの町〉の呼称が富山市八尾町の郷土史的な範疇を越えて、民謡の近代を考えるうえで示唆に富むことを示している。また「民謡」概念の学際性を国文学、民俗学、地理学それぞれの議論から掘り起こし、本論文の理論的な基盤が適切に提示されている。

第一章は〈うたの町〉認識の前提にあるひとつのうたと市町村の不可分な関係の成立を考察する。著者は日本政府主導による最初の民謡収集事業として知られる『俚謡集』(1914年)にさかのぼり、その成立過程に考察の鍵を見出す。『俚謡集』は従来の好事家的な収集本とは制度的背景や調査プロセスが異なり、国民文化の形成、就中、地方の位置の確立という政策が絡んでいた。この「上からの」収集事業に対してどのように地方知識人が「下から」呼応したのか、ドイツの *Volkslied* 収集事業が遠く八尾町の有識者を動かすに至ったのか、このような問いから〈うたの町〉という自意識が生れる過程に見られる空間や歌詞や楽曲の秩序化が論じられている。地方の有識者と一般の歌い手や踊り手の柔軟な関係にも著者は注目し、両者の間に「やわらかな統制」が加わったと考えている。著者は国民的イデオロギーを地方本位に再解釈して、自分たちのものに仕立てていく地方の有識者の姿勢は、その後のおわら指導者の基本となると指摘している。

第二章はおわらの文化的公認にとって大きなステップとなった富山県主催一府八県連合共進会(1913年)を議論する。これは明治前半より近代化を象徴する催事として影響を持った博覧会をモデルとするものだが、観覧客はこれを通して新しい世界に対する地理的な想像力を刺激されたと述べる。「豊年踊」を東京からの来訪客、富山県民の前で演じた八尾町民は、自らの郷土の芸能という自負を持つに至り、振付の創作へと赴いた。著者はこのような一足飛びの環境の変化を地方博覧会という文化装置への接合という側面から詳述している。そして県庁の先には首都が控えていた。

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

第三章はおわらの東京進出を、後藤桃水主催の「全国民謡大会」(1921年)への参加から論じる。これまで民謡史で繰り返し論じられてきたように、これは初めて「民謡」の語を冠した大がかりな催事で「民謡」の意味や文化的位置づけに大きな影響を残したが、おわらもまた例外ではなかった。民謡は威厳ある地方文化として全国レベルで公認され、後の保存会運動につながった。本論文は会場となった神田錦輝館のプログラム、学生街神田の空間分析から、地方と中央の摩擦、同時代の民衆運動に近い後藤の「民謡」概念を再考している。

第四章はおわらを地方文芸から考察する。大正時代には多数の詩雑誌が地方で出版され、その連携と統制の機関として北原白秋、野口雨情ら東京在住の詩人たちが主宰した詩雑誌・結社が機能していた。地方の詩雑誌・結社は郷土の象徴や気質、アイデンティティを形成・増幅することに大きな影響を及ぼし、富山県では日本海詩人連盟とその機関誌『日本海詩人』が、重要な役割を果たした。彼らはおわらの歌詞において純朴さや平明な表現を重視したと著者は指摘する。この団体・雑誌を地方舞踊・民謡運動としてのおわらの自己評価のなかで捉えた点に本論文の先駆的意義がある。

第五章は1929年、日本橋三越開催の富山県物産陳列会で初演された〈新踊〉を、外の観客に「見せる」ことを強く意識した郷土芸術として論じる。デパートは博覧会、文芸雑誌とは別のはたらきを持つ近代化の文化装置であり、ここでは新たな都市部消費者の嗜好に合わせて、男女別の振付が新たに案出された。著者はそこに単に商品化、ショー化に留まらない同時代の八尾町における青年団、農村娯楽、花柳文化の価値づけの変化も密接に関わっていたと説得力を持って検証している。

第六章は同じ1929年に発足した越中八尾民謡おわら保存会が〈うたの町〉イメージを「総合プロデュース」する様子を、その創立宣言、組織、取材、歌詞募集や記念グッズ制作事業、町内空間の統一的演出など多方面から描く。その構想・実現・挫折を「空間的実践」(アンリ・ルフェーブル)としての的確に分析している。

第七章はおわらに関わる公式史において封印されてきたアジア太平洋戦争下の状況を、総力戦体制に向かう全国的なかけ声に呼応する地方の動きとして明らかにしている。そこには慰問歌詞の創作や募集事業の変容、移住先の米国より富山に戻った文学者翁久允の活動から、保存会がどのように翼賛体制に協力していったかが、克明に記されている。国威高揚運動の実際を地方資料からえぐり出した論考としてきわめて貴重である。

以上のように本論文は民謡の概念の成立、国家の文化政策、地域と全国の呼応、歌詞・舞踊・保存・新作・観光・軍国化の各方面から〈うたの町〉をめぐる近代の「空間誌」を考察した総合的かつ先駆的な研究である。7つの章で取り上げられているのは民謡と地方をめぐる政治、拡大する消費社会、身体と声の意味づけ、芸術と表現、文芸と出版、そして地方と中央の相克と協力など、きわめて多岐にわたる問題である。著者はとりわけ地理的想像力の働きを重視し、その身体性や物質性の具現化と実践にかかわる過程を探求している。

課題として残されているのは、本論文が提唱する「空間誌」が従来「空間史」をどのように刷新したのかが明確でないこと、偶発的なものの生起する歴史=時間と、必然性に縛られた地理=空間の連続性についての考察に乏しいこと、大きな概念と具体的な実践の間をつなぐ議論に乏しいことなどが挙げられる。ただしこれらの問題点はいずれも今後の

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

研究の進展によって改善が見込まれるものであり、論文の価値をいささかもおとしめるものではない。

以上を総合的に検討した結果、本論文を学位授与にふさわしいと、審査委員全員一致で判定した。